

## 信頼できる人 大平君

福田 赳夫

昭和二十年八月十五日、わが国は敗れて戦いは終わり、やがて連合軍將兵が続々と進駐し、その本部を第一生命ビルに置き、他の焼け残りのビルが次々と接収されていった。

焼け残りビルの多い霞ヶ関で進駐軍の目につきそうな立派なものは何ととっても大蔵省ビルだ。次の接収は大蔵の番だと消息通の間でささやかれ、大蔵省は挙げて心配していたし、特にそのような問題の直接責任者は、当時、官房長だった私自身であつたから気がでない。

ところが津島寿一大臣は一向に気にしていない様子だった。進駐軍総司令官マッカーサー元帥に直接面談し得た關係は、東久邇宮首相のほかは津島大臣だけであり、大臣としては、マッカーサー元帥から特に好意を寄せられていると信じていた模様で、その自分の所管する大蔵省ビルが、よもや接収されるなどは考えてもいなかったらしい。しかし、九月十一日、突然司令部からの指示が発出された。「大蔵省ビルを接収する。七十二時間以内に撤去せよ」と。

その夜八時頃だったか、官房長で秘書官を兼ねていた私と、大平、宮沢（喜一）両秘書官の三名が大臣から大蔵大臣官邸へ招集された。招集を受けた三人が参集して、秘書官室に待機していると、大臣が「すぐ次官を呼べ」という。

山際（正道）次官が現われるのを待つて、一同大臣室へ入る。津島大臣は非常にご機嫌が悪い。悪い筈だ。大

蔵省ビルは接収されることになり、大臣自らの自信も、全省員の期待も完全かつ無惨に裏切られたからである。

山際、福田、大平と大臣室へ。少し遅れて宮沢。その最後の宮沢君の後のドアがキチンと閉めてなかった。それに目をとめた津島さん、「近頃の大蔵省は、職員の仕事がゆるんだ。こんなことで大蔵省は敗戦日本の背骨になれるか。次官どうかね？」それから何と八時間に及ぶ訓示。

実直な山際さんは、直立して不動の姿勢で拝聴。福田、宮沢は坐ったままで適当な相槌。大平は、終始頭を下げていたが、恐縮して拝聴していたのではなく、そんな格好で睡をとっていたらしい。

その時、私はこの男、役人には珍しい大器だなあと思った。徹夜訓示は、朝五時頃終了。疲れ果てたが、ホツとした気持でそれぞれの部署についた。

こんな具合で、私と大平君との接触は、戦争末期から終戦直後の津島大蔵大臣下の秘書官同士という形から始まった。

大平君は信用できる人であった。何事でも頼んで承諾されたことは、全く安心できた。政界での二人の関係には、好天の日も嵐の日もあったが、私は「大平君は信頼できる人だ」といい続けてきた。今もなおそう信じ、そういつている。

(衆議院議員・元内閣総理大臣)